

第3章

「すくすくルーム」のいま

1. 恩送り
2. 笑顔がつながる
3. 寄稿

恩送り／支援される側からする側へ

スタッフ

板林 恵



私は、主に「ママサロン」のスタッフ・「すくすくルーム」の見守りスタッフ・広報・事務全般などの業務を行っています。

「すくすくルーム」には妊娠中のママの来所も多く来所します。後にご出産され、可愛らしいおくるみに包まれた赤ちゃんに「はじめまして」の挨拶ができた時の喜びはひとしおです。ねんねの赤ちゃんが、寝返りをした！ハイハイをした！歩いた！お話が上手になった!!と子どもたちのひとつひとつの成長に感激し、元気をもらっています。そして、ママたちが育児に対して自信をつけていくの目にもなります。初めての来所は不安げな表情だったママたちも、子育てという共通の事柄を通じて、コミュニケーションをとり、育児の情報交換をし、どんどん育児の自信を持ち、成長していきます。そして新しく来所された方に、積極的に話しかけ、情報提供をし「私もその悩みがあったけど、大丈夫だよ!」と声をかけていきます。相談する側から相談される側へ、まさに生きた情報提供がされていると感じます。土日祝日はパパや祖父母に抱っこされ、いつもと違った表情を見せる

子どもたち。家族で子どもを見守る。そんな温かい光景が「すくすくルーム」にはあります。

さて、私自身のことを述べますと、長男が一

歳八か月の時に被災をしました。震災から2年後、次男の妊娠中のこと。仮説の自宅で休んでいると、玄関をたたく音が聞こえました。二月の凍えるような寒い玄関先に、たくさんのベビー用品と「こそだてシップ」のチラシを抱える女性がいました。「妊婦や乳幼児のいる家庭を人伝えで聞きながら、該当する家を一軒一件回っている」とのことでした。後

にこの方が、伊藤代表であることを知り

ました。

私は特に震災後、ずっと忙しく働いて

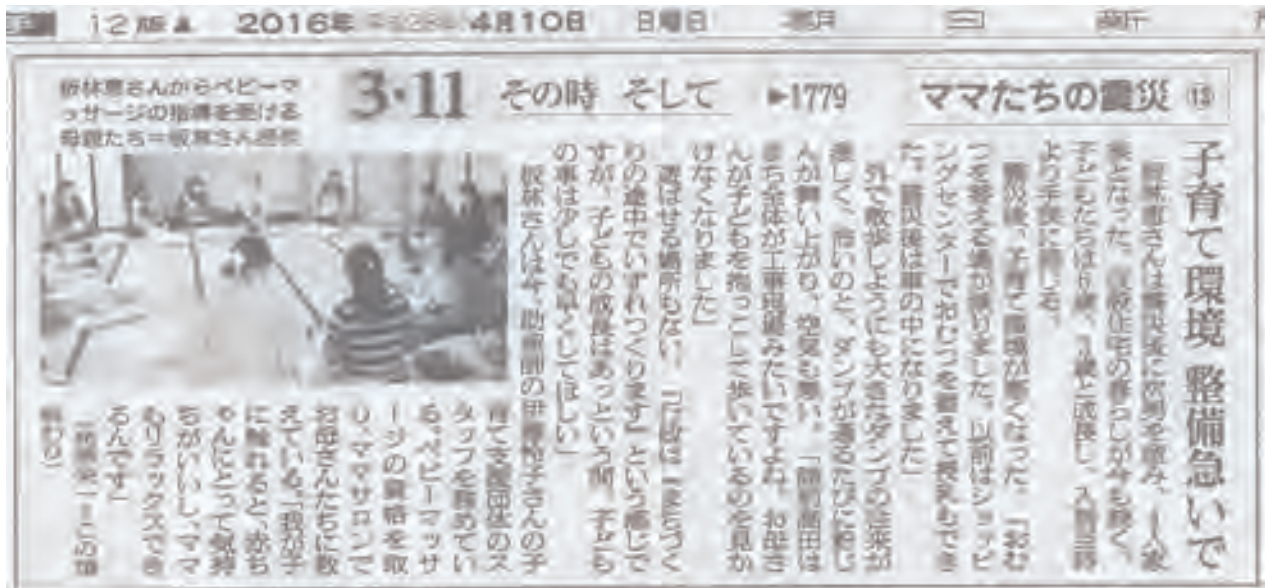
いたため、地域の情報に疎かったのです。初めてそのチラシで「赤ちゃん訪問」と「ママサロン」について知りました。私が住むような小さな仮説には物資が届きにくかったうえ、特に子育てに必要なものは手に入りにくい状況でした。何よりわざわざ家を訪ねて来てくださったことは、間もなく控える出産の励みになるものでした。

次男が生まれてからは「赤ちゃん訪問」を利用したり、「ママサロン」にも参加しました。赤ちゃんがゆっくり過ごせる場所がなかった中で、「ママサロン」は私にとって癒され、毎回楽しみな場所でした。

そんなサロンに参加中のある日、「スタッフ



朝日新聞



としてママサロンでお仕事をしてみない？子どもと一緒にのお仕事でOKよ」と代表に声をかけられました。できる範囲でのお手伝いかつ、子どもと一緒に参加できるのならと思いついて挑戦しました。サロン準備やお弁当の配布など、ちょっとした仕事でしたが、役を与えられてもらえたことがとても嬉しかったです。このように私のスタッフとしての仕事が始まりました。

専門的な相談は助産師や看護師につなぎ、私は「傾聴スタイル」でママたちのお話を聞いてきました。私がこれまでたくさんママたちとお話をして気付いたのは、頑張りすぎているママが多いということです。特に初めての子育ては不安でたまらない、というのは私自身もそうでした。「ちゃんとしなないと！」と頑張りすぎでししまう傾向にあると思います。「すすくすくルーム」では安心して過ごせる環境を整え、子育て世帯が力を抜いてリラククスできるような寄り添ってあげたいと思います。「こそだてシップ」の強みは、スタッフ全員が温かく優しく、「子育てを支援すること」について真剣に考え、行動していることだと思います。

大船渡は転勤族が多いため、住み慣れた頃にお引越しをされるご家族が多くなります。お引越し前のご挨拶に手紙を持参してくれる方がいたり、転居先から御礼や感謝の手紙を送ってくださる方も多くいます。そこにはこんな言葉が綴



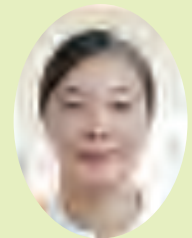
られています。「大船渡で子育てできてよかったです！」「こそだてシップ」はこの声が聞きたくて、今日も「すすくすくルーム」で皆さんを笑顔でお迎えしています。

陸前高田市米崎コミセン「閉会ママサロン」(平成 29 年 3 月)

笑顔がいっぱい「すくすくルーム」

スタッフ

大村 恵世



三陸鉄道「盛駅」から徒歩三分。「すくすくルーム」は、大船渡市内で唯一エレベーターのある建物、サンリアショッピングセンターの二階にあります。震災後リニューアルオープンしたこのショッピングセンターの中に、子ども達の声が響く場所があるのは、とても温かな光景です。

十時に開室する「すくすくルーム」を利用されるのは、妊婦さんから未就学児とご家族たちですが、時折、買い物に来た様々な年代の方がお部屋をのぞかれ、子ども達の様子に目を細めていかれます。ショッピングセンターの一角にあるという気軽さからか、育児に奮闘するママだけではなく、パパも入りやすいお部屋なのが魅力の一つです。

「すくすくルーム」に入ってきた子ども達もまず目にするのが、お部屋の真ん中にあるすべり台です。冬の長いこの地域では、お部屋の中で体を動かせるすべり台は大人気です。ハイハイを始めた赤ちゃんも、好奇心のままにすべり台の坂を上っていき、成長した姿を見せてくれます。そして、すべり台のつぺんからは、盛駅を出入りする列車が見えるので、みんな大喜

びです。

震災後から続けている「ママサロン」は、現在月二回の開催になりました。赤ちゃんも二人で初めて外出するのが「ママサロン」。という方も多く、ママ達の大事な社会デビューの場になつていきます。畳の上にゴロリと赤ちゃんは寝転んでノビノビ体を動かします。ママのリラックスしたおしゃべりを聞いていると安心するの

か、ご機嫌な赤ちゃんが多いです。育児情報が少ない地域なので、ママたちはお互いに情報交換しながら、母としても共に成長していきます。ポッポポッポ。お部屋にかけられた鳩時計が四回鳴く四時で、すくすくルームは閉室です。「ホラ。鳩さん鳴いたね。」とママに促されて、子ども達はお家に帰っていきます。

「すくすくルーム」には毎日、色々な方が訪れます。「すくすくルーム」を目指して来られる方、お買い物ついでに一休み遊んでいく方、お子さんがいなくても「へーこんな所があるんだね。」とのぞいていく方など、多様な方とお話する場です。

小さなお部屋の中でも、子どもたちは元気

いっぱい。目をキラキラと輝かせて遊び、そんな子供たちの姿に大人たちも笑顔をもたらしています。そして、沢山のパパたちも気軽に遊びに来てくれるようになりました。パパたちと遊ぶ子供たちはいつもより少し、ワクワクしているかもしれません。

私たちスタッフは、そんな皆さんのいろいろなお話をお聞きします。子育てなどの悩みは様々ですが、誰もが抱えている悩みでもあります。「二人ぼっちじゃないよ。いつでも来てね。」と笑顔でお迎えています。

子どもは地域の宝物。だから皆で大切に育てていく。そんな雰囲気づくりをこのお部屋も含めてしていければ。子育てには、ママやパパだけではなく、地域全体が元気に賢くなるヒントがあるのだと思います。素敵な子どもたちの未来を大きく



「新すくすくルーム」前にて

大きく育てていく。そんなお部屋にしていきたい。と私は思っています。今日も沢山の笑顔をもたらしています。

寄稿

「シップ号」の窓から

震災から五年の感慨

伊藤四士良



いつまでも記憶が生々しいのは人間にとって
は惨いことだし、反対に記憶が消去されて行
くのも同じように惨いことに違い無い。

あの日から五年が過ぎた。今にして思えば未
曾有の大災害を機に、変らなければならなかつ
たもの、変えなければならなかつたあれこれが
有ったはずだ。

歴史上には大災害を機に消滅した文明や都
市、反対に復活変貌を遂げた都市もある。

果たして好機を逸してしまったのか。種々の
思いが去来する。

震災以前の活動母体「母子サポート」の立ち
上げから程なくしての「東日本大震災」。

その日の夕方には市内の緊急避難所への駆け
付け支援、困りごとへの対応。あらゆる「物」
の支援活動。次第に克明になる手の施しようの
ない甚大な被災の実態。

数日後には全国から、海外から応援救助隊の
到着。三日目には市内の幹線道路の一部が山の
ような瓦礫の下からわずかに姿を現わし、一週
間後には歩道のカラーブロックが掘り出され
た。自衛隊や土木建設会社から総動員された大

型重機の圧倒的な威力を見せつけられる。

札幌・福岡・滋賀等々、日本中のナンバープ
レとをつけた大型ダンプが列をなして走り回
る。戦場である。

夥しい数のボランティアの活動も広汎化し、
漸く電気が回復し、携帯も繋がります。初めて
人の顔を見、目を見て話すことが出来るように
なった。十日以上が経っていたような気がする。

二十一日、捜し続けていた高田の伯父の遺体
に漸く対面できた。

地元の助産師や看護師に加え、東京を初め関
東の団体・個人の応援や熱烈な支援に突き動か
され、「母子サポート」は新たな活動母体「こ
そだてシップ」として本格的な被災地の母子支
援活動を開始する。特に「ジュスペール」の
物心両面からの支えは絶大なものがあつた。

名称の「シップ」はスポーツマンシップ、リー
ダーシップ、と同意のシップである。新たな船
出のシップでもある。

日本財団から日産クリッパー（軽自動車）を
贈呈され、以後この「こそだてシップ号」は陸
前高田市、大船渡市、気仙郡住田町、九十三ヶ

所の「仮設集合住宅団地」と数十の「みなし仮
設住宅」（個人の事情で住むことになった住宅
も仮設住宅への入居とみなす）を巡回訪問する
頼もしい足になる。

「こそだてシップ」のスタッフ（助産師）を
乗せ、地元の私が運転手としてそれらの仮設団
地やみなし仮設住宅を巡回訪問し、月に二回（四
日）必要な支援を行なってきた。

巡回訪問という手法に出たのは、情報通信網
も壊滅した被災地には妊娠中の女性や子育てに
不安を抱き、困窮しながらも「声を上げられな
いでいる母子」がまだいるに違いない、という
急迫した思いに動かされたことであつた。

巡回訪問を始めてみると、緊急を要する事案
や予想以上の困難・種々の壁に突き当たる。

仮設住宅団地とは、入居している被災者は従
来のコミュニティが崩壊してしまつたために
「集合」とは名ばかりで、互いに隣も近所も他
人意識が濃厚で、意思疎通も希薄、その上に相
互に「情報遮断」という「自主規制」を強いて
いる。

そのような住環境の中で、「赤ちゃんのいる
お宅は？」「妊婦さんは？」の懸命問いには「個人
情報保護法」という壁が立ちほだかる。

数百世帯が入居している住宅団地なので、支
援を必要としているママ達がいるに違いない。
しかし、役所も住人も「個人情報」を盾に教え



「巡回赤ちゃん訪問」専用車シップ号（ニッサン・クリッパー）

てくれない。

「情報」だけが守られて肝心の「個人（人間）」を守ろうとしない「個人情報保護法」とは何か？ 本末転倒の極みである。

スタッフが居宅を訪問している間、私は団地の各棟をくまなく回っては、赤ちゃんの洗濯物が出ていないか、子供の靴、乗物、遊具は出ていないか、それらから「情報」を探りだしスタッフに伝える。

やがて「こそだてシップ」の「巡回訪問」の

情報が「口こみ」で拡散浸透し、次第に訪問のオフアールが寄せられるようになった。

やがて、東京の渡邊さんが窓口になり、「巡回訪問の行程表」が作成され、それに従って「訪問チーム」が二手になったりして気仙管内を巡回するシステムが定着し、「こそだてシップ」の「巡回訪問」は被災地の事情にピタリと寄り添い、本来の設立趣旨に見合う活動が保障されることになった。

「シップ号」の走行距離は広範な気仙地方を東西南北に移動することで、ある一日の走行距離が一二六kmに及んだ時もあった。この春までの総走行距離は一五二六四kmになる。（※資料編気仙の「仮設団地配置概略図」参照）

あの震災発災から平成二十七年八月に「巡回訪問」が休止になるまで、多くのスタッフがこの未知の気仙を舞台に駆け巡った。特に渡邊さんは、その内に「土地勘」が出来て、市内は無論、三陸町の方まで自分で車を駆って単独行動（訪問）が出来るようになったのには驚きとともに感心の一語。

私自身、このような未曾有の大災害に遭遇（私も家内も二度津波を体験している）したことで、これまでに「見えていなかったものが見えてきた」というか、「見させてもらった」という実感、手応えのような物を得た気がする。

それは、「未曾有の大災害」が私たちの前に「暴

いて見せてくれた」と言ってよいかも知れない。私たちの社会や制度、システムに潜む諸々の不備、弱点、傲慢、全てのパラダイムの無力さ等々を。

沿岸被災地の少子化、高齢化社会の到来。十年以上も前から警鐘は鳴らされていた。過疎化、医療格差、三十年以上も前から取り沙汰されていた。勿論、原発事故の破局的結末も。

この未曾有の大災害がこれらを一気に暴き出し、さらに容赦の無い喫緊の課題として私たちに突き出したのではないのか。

昨年末から「こそだてシップ」は、大船渡市の「子育て支援センター」として今後は一層、被災地（気仙地方）の医療・子育て環境を初めてとする「諸々の不備」に向き合うことになった。

そのためには被災地気仙の復興と将来構想のための「子育て支援」の制度や組織、何よりも行政の「子育てマインド」の見直しが避けられない。

大震災以来、「こそだてシップ」の活動を通して、最終的に見えてきたものは、人と人の関係性、「人間（赤ちゃん）」は社会的な制約の中でしか育たない」という自明の原理であったように思う。

実際、「こそだてシップ」の「巡回訪問」でも、突き詰めると子育て支援が、夫と妻、嫁と姑、

娘と母、など家族・家庭という複数同時進行の「人間関係の有り様（関係性）」と無関係ではなく、しかも、そこが他人（支援スタッフ）も容易に立ち入ることが出来ない「閉ざされた領域」であることを気づかされるケースがままあったことである。

一方では、核家族化が常態化し、「子育て」が孤立化している現在であるからこそ、「子育て」にかつてのように「家族（力）資源」の有効活用が改めて再認識される必要があるのではないのか。

「爺・婆の力」の積極的再起動が不可欠であるろう。

「個人情報保護法」と「家庭事情」の二つ壁：「人間は社会的存在である」というのは、赤ちゃんが母親の胎内から初めて生み出され、受け止められる世界が、そもそも「家族とか家庭とかいう社会」の中だということ、しかも、そこを赤ちゃんは自分では選ぶことが出来ないで生まれ出て来る。

このことに関して、感銘深いエピソードがある。名前を失念したが、ある女優が初めて我が子を出産した時の感想を尋ねられ、「寂しかった」と発言し、その訳を尋ねられて「自分のお腹から出た瞬間、ああこの子はもう他人なんだ、もう私の子ではないんだ」という思いを強烈に感じたのだという。お腹の中に居た時は確かに

私に繋がっていて、完全に私の子（もの）だった（確信）のに…。

男には絶対に実感できない「母子分離」の瞬間・母子が別々の人格に分離する瞬間の感慨である。強烈な印象を残した女優の感想であった。

このエピソードは、誰の赤ちゃんも「私のもの」から「他人のもの」へ、つまり「出産」は子供を社会に委ねることであり、社会が責任を持つて「子育て」を請け負わなければならないこと、「子育て」が国や社会、地域、共同体の成り立ちを支える極めて合理的で根源的なプロジェクトなのだという事を示唆している。

あの震災を機に、思いがけず「こそだてシップ」の活動を手伝う中で、再びこの女優の一言を思い出し、被災地を巡回する「シップ号の窓」から被災地での子育て支援活動の意義と将来性について改めて強く噛み締めている。



住田町中上仮設住宅団地（熊澤さん）

こそだてシップ号運行記録

番号	月日	時間	場所	活動内容	職員	ボランティア	その他
1	4/29	9:30-11:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
2	4/29	13:30-16:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
3	5/8	9:30-12:30	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
4	5/9	10:05-15:02	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
5	5/12	9:30-11:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
6	5/13	9:30-13:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
7	5/13	18:10-18:00	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
8	5/16	9:30-11:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
9	5/20	9:30-15:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん
10	5/20	9:30-16:30	熊澤さん	熊澤さん(熊澤さん)	熊澤さん	熊澤さん	熊澤さん